

## 総会記念シンポジウム

### 4. これからのテキスタイルのあり方

わたなべ氏からは、中国等の海外に生産拠点を置いていても、「最後の勝負はローカリゼーション」であるという提言がなされた。「日本国内でのローカリゼーションを重視して、本当の意味でのジャパンクリエイションを作ることが大切であり、それを実行できるのがTDAのメンバーなのだ」と。

内丸氏は日本のデザイナーの自信の無さを指摘された。日本の工場は世界の言いなりで物を作り、日本から情報発信するパワーに欠けるのだ。「日本のデザイナーはもっと元気を出すべき。」「デザイナーはパワーをつなぐ役割を持つべき」等の国内デザイナーに対するエールを送られた。

又、橋氏からは、イタリアモーダエモーダ社での製作の現場がスライドで紹介された。

シンポジウムの締めくくりとして、わたなべ氏からは、今後のテキスタイルの現場では、いいプロモーターとコーディネーターとして、若い人をスターに育てる必要があり、セールスプロモートやデザインを理解してコーディネーターしていく人物の育成が大切であるとの意見があった。

コーディネーターの寺井氏はテキスタイルビジネスの全体像をとらえられて、大量生産、大量販売のビジネスが曲り角に来ていることを指摘され、これからは小ロットで個性のあるものが期待されているという方向性を示された。



「仕事に対して、あるがままの生き方、作りぎまをぶつける。」このポリシーをビジネス化していく過程では、様々なリスクはあるが、日本のテキスタイルビジネスを活性化させるには、この第一歩が必要なのである。

最後に寺井氏からは、TDA8年目である今、更に二桁目の年に向かって頑張っていく決意が語られた。

そして、場の熱気も覚めやらぬまま、この後は懇親会へと続いた。

(レポート 岡本祥子)

## 交流パーティー

第8回総会とシンポジウムの終了後、交流パーティーが開かれました。会場は、同じばるるプラザ内のレストラン円山で、夕映えの京都駅ビルとその界隈を一望にできるロケーションのもと50名の参加者が集いました。京都には格別の思い入れをお持ちという森山副理事長の乾杯の音頭により開会し、(古今東西?老若男女?・・・テキスタイルデザイン協会の構成メンバーの多様性を改めて認識しました)まさに、交流が深まった一夜となりました。

